霧の中のヨードル

中井正一

青空文庫

一九二二年頃の事である。

朝日新聞が写真班を組織して、富山から大町へぬけるコースを募集したことがあった。藤木九三氏、長谷川写真班員等も同行した。

そのとき劔と立山の「主(ぬし)」、かの有名な長次郎と平蔵がその郎党と共にこの行に参加した。

私も、写真機を肩に、一学生として、加わったのであった。

最後のコースは平の小屋、ザラを越えて、大町にぬけるコース。ザラにかかったのは昼であった。

山のピークは晴れ渡っていた。

数里へだたっている立山の頂上の神社の太鼓の音が、虚ろなほど寂かな空気の中を鮮かに、しかし、かすかに、広く広く空を真っ直ぐにわたって聞えて来る。

長次郎は私をいざなって、一つのピークに立った。そして昔の山びとと特有のヨードルを高らかに放った。鳶の鳴き方に一寸似た、〝Oho……horr……ooo〟という様な、美しい声であった。

声は遠く寂けさの中に消えて行った。しばらくして、思いかけず、見ゆる峰々から「木霊」が帰ってくる。

一つ二つ三つ……四つ。

そして、もとの空虚な深い孤独感の様な、静寂にかえって行った。
ところが、耳をうたがったのであるが、霧の底から、同じヨードルが帰って来た。
Oho……ho……rr……ooo……
一つ二つ三つ……
これは、霧の谷の底を、わたっている山びこが、遠い見も知らぬヨードルに、答えて呼んだに違いない。
私は何故とも知れない深い感動をうけた。
この高さで、よび合っている二つの孤独。
山と山の木霊の様によびかわしている、霧の中に追い求めているヨードル。
この寂けさの中にして、この孤高にして、相求めている淋しさ。
これは私に、今も、まざまざと、生きて、青春の声として、胸の中に響き渡っている声である。
山びとの、高さへの熱情、清らかさへの熱情、孤独への熱情、この熱情の底に漲っている、涯もない寂寥の美しさが、山の誘惑として、今も私の中に響き渡ってやまない。

〈一九五一・三〉

青空文庫情報

底本：「アフォリズム」てんびん社
　　1973（昭和48）年11月8日第1刷
初出：「灯影　10号」
　　1962（昭和37）年
入力：鈴木厚司
校正：染川隆俊
2010年3月13日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

霧の中のヨードル

中井正一

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/